

平成 27 年度「キャリア教育・就労支援等の充実事業」成果報告書

受託団体名	国立大学法人信州大学
-------	------------

I 概要

1 モデル地域の概要

①モデル地域の種類 ※Ⅰ型、Ⅱ型、Ⅲ型のいずれかに○を付してください。

	Ⅰ型（連携型：特別支援学校高等部及び高等学校の連携）
○	Ⅱ型（単独型：特別支援学校高等部のみ）
	Ⅲ型（単独型：高等学校のみ）

②モデル校の一覧

設置者	学校種	課程又は障害種	学校名（ふりがなを付すこと）
国立大学法人 信州大学	特別支援学校	知的障害	（しんしゅうだいがくきょういくがくぶ ふぞくとくべつしえんがっこう） 信州大学教育学部附属特別支援学校

2 研究課題

企業と学校・家庭をつなぐキャリア教育の推進 ～働くモデルとしての卒業生と生徒が共に活動する生活づくり、教育課程を補完する放課後学習の充実を通して～

3 研究の概要

以下、本事業のモデル校である信州大学教育学部附属特別支援学校を「本校」と記す。

- 平成26年度の研究成果と課題をもとに、平成27年度は、企業と学校・家庭をつなぐキャリア教育をさらに推進するために、以下の取り組みに重点を置いた実践的研究を行った。
- ①高等部において清掃活動を中心にした授業改善を行った。社会人キーワードを取り入れた清掃目標を一人一人に応じて決め、適切な支援を重ねながら清掃活動を行った。
 - ②卒業生をモデルとして高等部生徒の清掃活動の充実を図った。また、企業に就職した卒業生を招き、高等部生徒が卒業後の生活を学ぶ学習会を開催した。
 - ③放課後学習（アフター3）で、学校農園と生活訓練棟を活用した農作業・調理と販売活動を行うと共に、専門家の支援によって企業ニーズを意識した自己理解とライフスキル・ワークスキルの向上を図った。
 - ④信州大学農学部アルプス圏フィールド科学教育センター（AFC）と連携し、野辺山ステーションの野外実習施設を活用した農業体験プログラムを実施した。
 - ⑤日本特殊教育学会第53回大会で行われた自主シンポジウムにおいて、平成26年度事業のモデル校となった他大学附属学校と共同で研究成果の確認と課題・今後の方向性の検討を行った。
 - ⑥保護者対象の研修会や講演会を開催した。卒業生が働く職場の見学、施設見学、卒業後の生活に関わる研修会、本学部教員による講演会等を実施した。
 - ⑦教員対象の研修会を（就労施策研修、ビルメンテナンス研修、TTAP研修）開催し、

進路指導や清掃指導に生かした。近隣の特別支援学校教員も参加した。

- ⑧先進的な取り組みを行っている知的障害特別支援学校や障害者雇用の実績がある企業への視察研修を行った。

4 研究の成果

平成27年度は、企業と学校・家庭をつなぐキャリア教育をさらに推進することを目的とし、卒業生と共に活動する生活づくりと放課後学習（アフター3）の充実に重点を置いた実践的研究を行い、次のような成果が得られた。

- ①企業ニーズを採り入れた清掃活動を行い、自己評価をしたことにより、適切な支援を続けることによって高等部生徒が清掃に意欲的に取り組むようになると共に清掃の質が向上した。清掃だけでなく、個々に応じた目標や支援が職場実習や校内実習にも生かされ、一定の評価を得た。
- ②大学雇用の卒業生がモデルとなり演示することによって清掃のやり方が分かり、高等部生徒の清掃技能が向上した。また、アフター3活動で卒業生がモデルとなることによって、生徒のライフスキルの向上が見られた。
- ③アフター3活動で マナーや身だしなみなどを学ぶ活動を通して、生徒は「自分はがんばった。しかし、できなかったことがあるので次は何を工夫したい」という具体的な目標を持つようになった。また、農作業や調理活動を行うことを通して、仕事の大切さや働くことの意義を学ぶことができた。
- ④農学部野外実習施設（農場）でキャベツ苗の植え付けを高等部全員で体験することにより、農業の実際を知り、労働の大変さや大切さを知ることができた。
- ⑤日本特殊教育学会第53回大会において行われた自主シンポジウムにおいて、障害者雇用について各校の成果と課題を発表し、今後の国立大学と附属学校の果たすべき役割について多角的に論議した。
- ⑥保護者対象の研修会、講演会により、保護者が卒業後の生徒の生活につながるキャリア教育の必要性を知り、キャリア教育に対する保護者の意識が高まった。
- ⑦教員対象の研修会を通して、学校でのキャリア教育の見直し、教育課程への位置づけについて考え、実践に生かす機会となった。
- ⑧先進的な取り組みをしている特別支援学校と企業を視察し、教育課程におけるキャリア教育・キャリア発達の位置付け、評価の視点と手法、雇用現場での支援方法等に関する研究成果や動向について学び、有用な情報を収集することができた。

5 課題と今後の方策

平成27年度の研究を通して、以下の課題が明らかになった。

- ①進路指導主事、ジョブコーチが中心となり、企業ニーズを意識した清掃活動を積み重ねることによって、生徒の清掃に対する姿勢や技能の向上が見られた。今後は、学校生活における作業単元学習や個別学習においても同様の取り組みを位置付け、その効果を検証していく必要がある。
- ②卒業生とともに活動し、卒業生が働く姿を見ることによって、生徒が卒業後の自分の姿を具体的にイメージすることができた。今後は、できるだけ多くの卒業生の姿に触れる

機会を増やし、生徒の仕事に対する意欲を育てたい。

- ③放課後活動（アフター３）の農作業、調理活動、マナー等の実践講座を通して、目標をもって活動することができるようになってきている。今後は、学校生活における作業単元学習や個別学習においても同様の取り組みを位置付け、その効果を検証していく必要がある。
- ④大学附属施設との連携により労働の大切さを実感することができた。農学部野外実習施設での体験学習を継続する、教育学部キャンパスでの就労体験を行うなど、今後も取り組んでいきたい。
- ⑤保護者の意識を高めるために実施した研修会、講演会の効果が実証できたとともに、学校職員の研修を積み重ねることによって、学校での支援に生かすことができた。今後も継続して取り組みたい。
- ⑥視察研修で学んだ各校の実践や企業の取り組みを参考にし、小学部からのキャリア発達を見通した取り組みや社会スキルを高めるための高等部教育課程の見直しを行う。